

安藤昌益論著「自然真営道」における「大序巻」  
ならびに「真道哲論」の現代的意義

野田彦四郎

The Modern Significance of “Tajokan” and “Shindo Tetsuron”  
in *Shizen Shineidô* by Shôeki Andô

Hikoshirô NODA

Shôeki Ando is the first Japanese philosopher who was introduced to the West, as “a forgotten philosopher” by E. Herbert Norman and whose thought has been highly estimated since. His works are very voluminous and an entire sketch of them has not been attempted yet.

The purpose of this article is to study his creative and unique idea that is found in “Tajokan” and “The 25th Shindo Tetsuron” contained in his book, *Shizen Shineido*.

First, I attempt to summarize the contents of those two articles and to trace the development of his thought. I emphasize that his idea is based on physiocracy and his philosophical method is dialectic. Secondly, I classify and arrange his several articles which deal with such basic ideas as (1) Feudalism (2) Confucian scholarship (3) Buddhism (4) Shintoism (5) Taoism (6) medicine, etc. He severely criticized these concepts. I add my criticism on his view of them. Furthermore, I comment that his philosophy is also criticized by such scholars as Dr. Ienaga and Prof. Miyagi as being too peculiar and unique.

I conclude my article by describing the modern meaning of his thought.

安藤昌益の哲学書「稿本自然真営道」における

「大序巻」ならびに「真道哲論」を主題とした理由

わが国において破格抜群にして独創的思想家と評せられている安藤昌益は（1703？～1762年）、すなわち元禄の末に生れ、1700年代の中頃、延享から宝暦にかけて、八戸、大館などの「和邦ノ偏郡」で町医者をしていた。

彼の思想は近代を超克し、なおかつ現代に变革を迫るほど斬新な内容を含んでいると最近、見直されてきてはいるものの、それは彼自身が言っているように「世人此ノ書ヲ視ル者、驚神シテ疑ヒヲ為サンカ」の通り、彼の時代においては容易に理解を得られるものではなかった。

その思想はあまりにも当時の時代感覚を越えていたために「時未だ至らざるに、偉大に過ぎて」、孤立してしまい、有力な継承者も出なかった。その結果、その存在は永く埋もれてしまい、ついにカナダ人、ハーバート・ノーマンをして「忘れられた思想家」と評せしめた。ここに私は「土の哲学者」と称せられる数々の論著のうち、「稿本自然真営道」における「大序巻」ならびに「第二十五、真道哲論」を主題として、彼の哲学の現代的意義を考究することにした。

けだし、前者は、「自然真営道」のうち、最晩期の著作であって、彼の思想の到着点を示し、そこに昌益思想の結晶体があると考えられるからであり、そして後者は同書のうちで前者とともに独立した単独巻として扱われており、これまた晩期の彼の思想、わけて社会思想を凝集しているのみならず、彼の門弟たちの思想の傾向をも示し、そこに昌益一門の思想の群像が浮き彫りにされると考えたからである。

### 「大序巻」の概要とその主張<sup>1)</sup>

大序巻は昌益の生涯における最期の力作であり、その絶筆である。そこに彼の思想の神髄がある。そのうち前半の第一から第十五段落までは昌益の作であり、後半の第十六段落と第二十二および第二十五段落は仙確の手になることは確実である。その他の後半の部分は昌益の遺稿そのままか、または若干の省略・整理を仙確が加えたものか、あるいは生前の昌益の構述を再現したものか、それらが混在したものかは不明であるが、いずれにしても仙確の手が加わったものと言われている。

本書の冒頭において「存在とは何ぞや」「自然とは何か」「その究極の物質はいかに」などと問題提起をする。そして宇宙における存在とは運動であり、運動とは矛盾による展開であると説いている。それが「四行・八気」の諸要素の相互作用に発展し、通・横・逆の方向で循環し、天地、大宇宙は生きて直耕しているという。続いてこの直耕が凝縮した形で表われるのが家ごとの炉の働きと、人の顔の八門（目・鼻・耳・口など）であると、彼独得の発想が生れる。そして炉の働きと八門の感覚作用とを天体の運行と照応させ、季節の農耕と関連させ、人の精神活動や内臓の機能と対応させ、気宇壮大にして精密な哲学を樹立する。そこには農民の生活感情が脈打っている。そこから人間平等論を打ち出し、階級社会の廃絶を主張する。

後半は昌益に対する顕彰ともいべき仙確の一文にはじまり、また兵乱に間連することより「法世」における階級闘争を痛憤する第十八段落も特徴的である。そのほかは前半の自然哲学の詳細にわたる敷衍に加えるに数多くの新見解をもってしている。たとえ仙確の筆になるところがあるとしても、昌益哲学の到達点としての思想が鮮やかに論述されている。

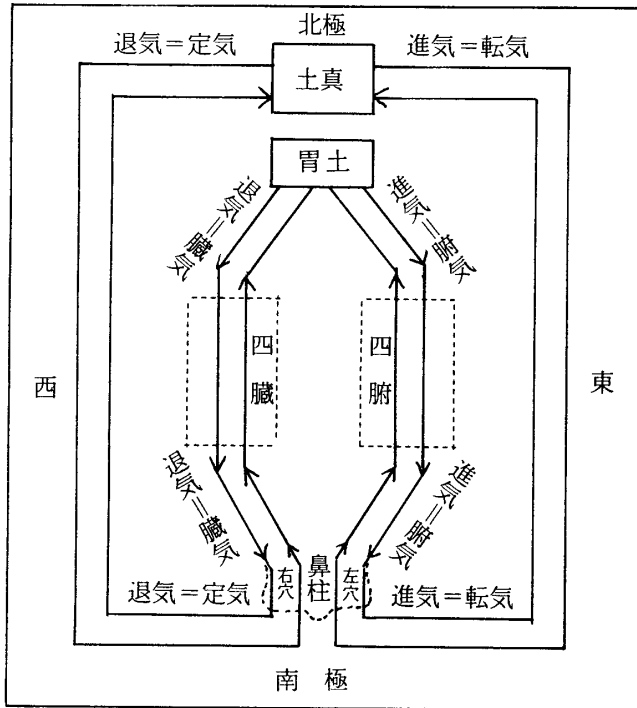
大序巻に、にじみ出ている昌益の哲学の迫力は、何と云っても、「人間の現実から出発する態度」である。観念から出発せず、実事求是の哲学である。そして彼は「目前と己身」の事実の代表的なものとして「炉」と「面部の八門」を強調している。この二点は天地自然の運動における諸要素の相互関連を集約したものであるからこれらの活動は天地万物のあらゆる運動に対応しあう。こうして、天体—四季—農耕—炉—顔—感覚—内臓を直結し、遙けき宇宙の天涯から人身の内奥まで通ずる「一系」「一連」の運動が系統づけられる。たしかにその対応と系統づけには、奇抜な着想ながらも彼の意図する「客観的自然と人格の主体的営為とを貫ぬく普遍的運動の法則の把握」への迫力を感じる。これが彼の自然哲学の特色であり、そこから天文学と向きあう医者がうまれるし、またこれを逆説的にいえば、身体宇宙論がうまれるし、所説の「直耕」による労働の汗が滲みこんだ認識論が引き出されるわけである。

彼は独特の語として天地を表わすのに「転定」、天下を「転下」としている。その転定と人身の気との相互関係を図示すると次の図のようになる。

### 「真道哲論巻」の概要とその特徴<sup>2)</sup>

この第二十五巻の構成は「大序巻」に付された「統目録」によれば、(イ) 良演哲論巻、(ロ) 法世政事、(ハ) 真韻論の三つで、第二十五巻自体の目次は、(イ) 良子門人、問答語論、(ロ) 私

転定・人身相関図



法盜乱ノ世ニ在リナガラ，自然活真ノ世ニ契フ論，(イ) 炉ヲ以テ転下一般ノ備ハリヲ知ル論，(ニ) 声音韻ノ所以論，(ホ) 古説「韻鏡」妄失ノ論，の五つである。このうち(イ)と(ロ)がこの巻の二大柱となっている。「問答語論」は宝暦六・七年と推定される時期に昌益一門の全国的な集会の内容を議事録風に整理したものであり、「契フ論」はその集会で最後に論じられた問題を特にとりあげて，昌益がそれについて敷衍をなしたものである。

(1) 「問答語論」

について

この集会に参加した者は北海道の堅衡，秋田の昌益，八戸の仙確，慈風，信風，静可，

定幸，栄沢，須加河の湛香，江戸の中香，京都の龍映，静香，そして大阪の貞中，映確，すなわち昌益をはじめとして，その門人十三名よりなる全国的集会である。この会は用意周到に，明確な目標をもって討議素材はあらかじめ準備され綿密な議事運営のもとに進められている。討議内容の大略は次の六つに分けられる。

第一部 は儒教をはじめとする兵家，道家，医家，仏家，巫家の六法に対するイデオロギー批判である。(第一～二十項)

第二部 は「人はいかに生きるべきか」の問題を論じている(第二一～三一項)，第三，四，五部の前半までいずれも，「討議素材」に沿って議論されている。

第三部 はものの見方，考え方の問題が集中的に論ぜられ，彼らが「不住一・不出二」と明言する「互性妙道」の論理，「矛盾の論理」「弁証法の論理」がゆたかに展開される。昌益門の独壇の境地である。(第三二～三九項)

第四部 は直耕の道を中心として社会倫理，政治問題が議せられている。(第四〇～五六項)

第五部 は第一部におけるイデオロギー批判に立ち帰るが，ここではイデオロギーが果す現実の社会的機能に即して，広く社会的政治的観点からの批判を強調している。(第五七～七二項)

第六部 は以上をふまえた上で「われら何を為すべきか」の実践問題をかかげ真剣に討議している。ここで「直耕一般」「無盗無乱」の「自然世」に到るための過渡期の構想が描き出されてくるのである。こうして，昌益は，人は往々にして為政者となることを考えがちであるが，これは厳格につつしむべきであるとなし，「ではわれわれが為政の任にあたるとすれば」それは現権力を変えた時であるという。その上で「どのように変革するか」といえば，それは「決<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>，令<sub>レ</sub>耕<sub>レ</sub>，不仁，不罰」と表現している。すなわち最高支配者もまた自ら耕して食うとい

う状態に勤労化し、かつ上から仁政を布いたり、刑罰を課したりする統治者の権限を制限する態勢を現出しようというのである。(第七五項)

## (2) 「契フ論」について

昌益が考えている「自然世」を冒頭に出している。そこでは「上無ク下無ク」すべての者が生産労働に参加する「一般直耕」の社会、当今いうところの原始共産社会と大差のない状態をとりあげこれが、支配し統治する聖人の出現で崩壊し、階級社会となったと言い、これを「私法ノ世」「法世」と呼ぶ。そのため聖人とは反対の「正人」が現われ、上の権力を徹底的に弱め、革命的に制限し、別のものに転化させ、「一般・直耕」という「皆勞」の実現とその維持をはかるといふ農村共同体の《自治》である「邑政」を構想とすること、これが「契フ論」の特色であり、意図するところであるとするのである。しかし「契フ世」にはまだ上下関係があり、制限つきの権力がある階級社会であって完全に平等、自律の法政に属する社会である。いわば「法世から「自然世」へ、階級社会から無階級社会へ移行のプロセスにある一種の過渡期社会であるから、昌益はこの「契フ世」を架け橋として「法世」から「自然活真ノ世」である人類の本史を最高目標とすべきであるという至高にして雄大な構想を抱いているのである。

なお、第二十五巻の末尾に三つの小論が付されている。そのうち一つは炉についての昌益の自然哲学であり、続（「声音韻ノ所以論」と「古説『韻鏡』妄失ノ論」）の二つは「自然真営道」の第七、八巻で論述した五行論段階での彼の韻学を晩期における四行論にもとづいて改変しようとする意欲の著である。

## 「自然真営道」の真義<sup>4)</sup>

ここにおいて上述したところを総合して昌益が「自然真営道」と大書する真義を明らかにせねばならぬ、これぞ、彼の独創的発想による自然・活真・営道の意であって、彼は自然における根源的物質の運動原理が宇宙の真理を示していると説くのである。彼は「万物は流転する」の原理に立ち、前人未到の弁証法的な論理を展開している。その核心は次の通りである。

大宇宙である天地、日月、星辰をはじめとして人間万物にいたるすべての事柄<sup>ことわり</sup>や理、さらに塵、あくたに至るまで、泣くも笑うも、走るも坐るも、それぞれの存在の違いはあれ、すべて「土活真」の営む道によるものである。この土活真の法則的な運動を中軸として論ずるといふ意味から「自然真営道」と提唱するのである。すなわち土活真は万物流転のすべての原動力であり、万物の根元的物質であって、始もなく終りもない永遠の自己運動をするもの、そしてその運動こそは「自り然る自然」である。

次に「活真」とは何か。その実体である「土」は天と海の中央にある大地であるからこれを「土活真」と呼ぶのである。そしてその精である「土真」は天の中央の北極星に宿って生き活きと「気」を産み出し、永遠の活動を続け、停止も死滅もすることがない。その運動は一瞬たりとも止むことがない生成力に満ちあふれている。そしてこれが進むときは進気の木と火となり、内に退気の金と水をともなって「天」をつくる。この木・火・金・水を四行と称し、この四行が進退の自己運動をなし、進木・退木、進火・退火、進金・退金、進水・退水の八気となる。そしてこれらの四行・八気が互いに依存し、かつ対立する関係において、永遠の運動を続ける。これが互性・妙道である。「妙」とはこれら対立物の統一性をさし「道」とはその法則的運動をいう。人間・万物はすべて土活身の分身である。こうした生成発展の過程を「営道」という。宇宙・人生・万物をかくして大らかに発展せしめようとの雄図をもってこの「自然真営道」の哲学が創造されたのである。

## 「大序巻」ならびに「真道哲論巻」を貫流する安藤思想の獨創性

「土の哲学者、農民の思想家」と称せられる彼獨特の思想ならびにその理論構成は上記の二巻にどのように顕現し、その展開を示しているであろうか。これらについて、私は次の七項目すなわち、(1) 土の哲学者・農民思想家の立場から、(2) 封建制への反対意見提起、(3) 獨創の弁証理論、(4) ヒューマニズムと平和主義、(5) 儒教への批判、(6) 仏教への反論、(7) 神道・道教・医・巫に対する批判の各観点から原文を引用しつつ考察することにする。なお昌益の文章は獨特の文法・用語がある上に送り仮名も特色があるので、ここでは読み易くするため、句読点のみを付していくことにする。また文の横に(大序三四)とあるは「安藤昌益全集復刻一、および三の原書の頁数、及び「大序巻を」表わし、(哲論一三一)とあるは復刻「真道哲論巻、一三一頁」の略記である。

### (1) 土の哲学者・農民思想家の立場から

農民の魂を自分の魂とする昌益は、農民への温かい愛情、農民の欲求を受容する誠意がにじみ出ている。それらの一斑を次に掲げる。

- 直耕・活真・妙道の価値の重視      ◦ 在人而誦真宮道書，貴直耕活真妙道者在之則是乃真宮道書，作者再来也。 (大序 七八)
- 耕真道の重要性      ◦ 正人行備道，不欲私法書学矣。貴耕真道而不犯上食矣。 (哲論 一〇一)
- 転定と人と相和する道      ◦ 故転定與人一和，直耕活真妙道尽極。 (大序 六九)
- 土活真の真義      ◦ 故転下万万人一土活真也。土転定肉体故大活身妙体也。百姓直耕，就土不離，定幸明之揚問詳之。 (哲論 一一九)

上記を総合するに、天下の百姓は何万人いようともすべて土活真そのものである。土活真の「土」すなわち大地は、天地宇宙の精が肉体化、具現化したものであり、広大な空間に活真の気が精妙に凝集した実体である。百姓はその天職である農耕に打ち込むことによりこの大地に働きかけ、大地と共にたくましく息吹き、大地と離れることなく自然の道に営々としていそしむ、美わしく、愛すべき存在であるとの思想が紙背に徹している。

### (2) 封建制への反対意見提起

封建性は当然、早晚、徹頭徹尾打破すべきであるとは昌益の強固な意見であるがこれらを見ると、

- 勝者の栄侈      ◦ 勝軍立上為治，植乱根為荣侈視，忽乱起如春雪。勝者立上又如星 (哲論 一三七)
- 上の欲侈，民の不信      ◦ 上之欲侈有於下民直耕責取。故民窮。窮則必賊心起。故上法度，無信伏。上憎之。不信伏乃上侈欲罪也。 (哲論 一五〇)
- 封建領主の税斂      ◦ 若以至上成，為威貴，不耕，立税斂法，責取直耕，為戒罰法，為政事則上乃盜乱根成也。 (哲論 一三四)
- 諸侯の欲侈対策      ◦ 凡諸国為上之地而不為下諸侯之地。是若諸侯己領田耕道怠，可離国主為法也。 (哲論 一三九)
- 作意的な封建制と搾取      ◦ 良曰道不知治乱，私法始治乱也。故不欲治，不起乱，不期兵用兮。 (哲論 一〇八)

- 自然に対する制度への反省
- 静可日，不誑衆，不利己，不諂於上，不責下，不慢他不亢己也。（哲論 一一四）

ここに抽出したものは封建制に厳しく反対する昌益の思想の一部である。彼は領土的土地制度に反対し、その武力としての武士団を認めず、徳川の世代にあって軍備全廃を叫んでいる。ここに彼の反封建の態度、徹底した民主主義的思想の全篇に滲透しているのを見ることができる。

### (3) 独創の弁証論

彼の独創による永遠の運動の原動力は内因論であるが、その運動は「<sup>ひと</sup>自<sup>す</sup>然<sup>しぜん</sup>ル自然」の自己運動である。さてその運動の構造に分け入れれば、すべて存在する一つのものの中に二つが含まれ、対立しかつ依存する二つのものの矛盾関係、相互転化により有機的に発展すると説く。これらに関する記述は頗る多いが主要なもののみを挙げることにする。

- 互性論の確立
- 活真故常進退互性妙行。（大序 四四）
- 明德のみを説くものへの批判
- 故明德耳言者，偏惑也。暗迷耳音者偏惑也（中略）皆悉也。不知互性備，偏惑也。（大序 四七）
- 無始無終の妙道
- 故此哲論無始無終，活真自感互性妙道也。（哲論 九三）
- 日月・昼夜の互性
- 転定央為土体，進気精凝，日内，備月，転神退気精凝，月内備日，定靈，日月互性，昼夜互性。（大序 八）
- 自然とは八気の互性
- 故八気互性自然，活真無二活，不住一自行。（大序 九）

昌益の上記の「互性妙道」「二別一真」の論理はこれこそ矛盾の論理としての弁証法である。それはヘーゲルのその五十年前、そして毛沢東のその百五十年前にみちのくの哲学者の考案した「矛盾論」である。彼はこの矛盾論により社会革新、変貌への斬新、独創の思想を形成していったのである。

### (4) ヒューマニズムと平和への理念

彼は直耕の衆人、生産者大衆を第一義に考え階級の上下をよりどころとする思想を排撃した。

- 軍学不要の論
- 軍術殺人己亡，亡人殺己。（中略）軍術事微言，活真大敵也。（哲論 一二八）
- 個性尊重とヒューマニズム
- 人万万人而一人，一人而万万人也。二人観失也一人極偏失，不出二，不住一耳。（哲論 一〇六）
- 字書と治国平国家
- 本字書学問盜転道。罪事故如是。不能修一身，以何乎治平国家転下。（大序 三四）
- 親子の一和真道
- は無慈孝名。故親子一和真道而无稿災迷吟之患也。無教備道也。（哲論 一一六）

人間は何万人いようと皆同じ人間である。しかも一人々々が独特の個性の持主である。対立を越えて統一を念願し、いくさのない平和な社会の実現を希求する理念が満ちている。

### (5) 儒教への批判

昌益の儒教観も真剣味がただよっている。主旨の分期なものを挙げよう。

- 果して平天下成るか
- 聖人曰修身齐家治国平天下言。転下学者貴之。是貴乎。（大序 三三）
- 聖人は互性真道を知らず
- 聖人立上下二別私法。偏不知互性真道故也。

- 螻螂を引用し伏羲に対す。 (大序 三七)
- 伏羲始王成立上，采花餘為螻螂入籠，為之慰…(下略)
- 聖人，下衆人を苦しむ。 (大序 三八)
- 聖釈以来以横氣為主宰。立上下私法，欲情盛為教，不耕貪食，苦下衆人。 (大序 四八)

孔子、孟子をはじめとする儒教創始者たちが勤労農民大衆の勤労と生産の価値を考えず、しかもこれら聖人は不耕にして直耕の衆人の労作をたかり食いしているとして厳しく批判している。

#### (6) 仏教への反論

彼の仏教に対する態度も冷然たるものがある。数例を挙げることにする。

- 悟仏迷風二別の批判 (大序 二六)
- 悟仏迷凡二別，二門無備，救衆一門救七門無備。
- 諸宗・僧らの営みと直耕妙道と対比 (大序 七四)
- 故后世諸宗僧等座禪工夫，誦經陀羅尼，念仏，種々修行悉生死迷吟。故棄之，直耕活真妙道已備可行之。
- 直指人心等を偏惑とする。 (哲論 九九)
- 良曰，不知心者心知互性，一心妙具而為唯一心，仏心衆心，不生心，不滅心，直指人心等，悉偏惑也。
- 三陰三陽等は互性の備なし (大序 二七)
- 聖釈私法五行三陰三陽(中略)十干十二支十二氣無互性備偏惑也。故無真道象妄失也。故論心之事不知備互性妙心。

彼は釈迦の「天上天下唯我独尊」の言に基づき釈迦だけが唯一の正しい心をもつとすることを始めとして、仏心・衆心・坐禅による直指人心など悉く仏教に関する教説は一面的に偏ったあやまりのあるものであって活真の妙道を得ていないと非難するのである。

#### (7) 道教・神道・医学・兵学・巫に対する批判

昌益は私が既述した儒教、仏教に対すると同様、老子の創めた道教、わが国古来の神道、医学、兵学、巫に対しても激しい論調でもって批判している。次にその主なものを列挙する。

- 老聃は偽言盗食をなす (大序 三五)
- 老聃出為谷神不死偽談。貪食莊周出語寓言偽言盗食。
- 老子の考察は偏惑 (哲論 九八)
- 良曰，活真大退氣，具四行互性水矣。不知之而玄々・大道察者偏惑也。
- 兵学・医学・道教・巫は儒教・仏教とともに互性・明道を知らない。 (大序 三九)
- 転下万国儒・兵・医・仏・老・莊・巫学者，知活真妙道者絶無，何故乎。答曰遠尋古聖釈医老莊巫偏惑妄失書言耳，而不知備於目前与己身互性妙道。故妄偏迷吟。
- 古聖釈老莊廐は落罪の元凶 (大序 四八)
- 凡古聖釈老莊廐始万万書言悉明德明心明知耳言而不知互性備。故皆偏惑横氣，落罪根也。
- 老医巫は聖釈とともに偏惑説 (哲論 九三)
- 古書聖釈老医巫凡転下万書言，知非活真転定互性妙道，而悉清偏精生偏惑説也。
- 兵用は乱の器 (哲論 一〇八)
- 兵用乱器也。故不期兵用。
- 神名等は妄戯 (大序 四八)
- 天神七代地神五代論，廐子似仏説七仏。五時如来私作

- 則神名等妄戯不足下言作法也。 (哲論 一三〇)
- 医術は人道の大敵怨 ◦ 人身万物，八氣互性妙道備矣。医法不知人物氣行，愚推病論治方也。一一殺人轉下大罪也。故為人道大適怨也。 (哲論 一二九)

これらを要約するに，道教も神道も医学も兵学，そして巫もみな昌益の最重視する直耕の衆人，勤労大衆優先の主旨より甚だ遠く，またその思考方法も，弁証法的論理にかなっていない。とするものである。

‘A forgotten philosopher’として昌益を絶賛した E. Herbert Norman の論説

ノーマンは日本における先進的哲学を探求し続け，はじめて安藤昌益の論著に接し，その独創的，先覚的な思想をきわめて高く評価した。そして次に掲げる諸論文を完成した。

- ANDO SHOEKI: AN EIGHTEENTH CENTURY CRITIC JAPANESE FEUDALISM.
- ANDO SHOEKI AND THE ANATOMY OF JAPANESE FEUDALISM. さらにこの原著には別巻付加されている。

Containing the original text of passages quoted in Volume I from the SHIZEN SHINEIDO and the TODO SHINDEN

- これらの日本語版として「忘れられた思想家——安藤易益のこと」岩波新書上下二巻がある

ここのノーマンの原書の中軸としてその要旨を論説することにしよう。

- (1) 自然真営道を神髄とする安藤昌益の哲学の根本精神について次のように明記している。

Nature should be viewed as a whole and it is the false philosophies which have set up artificial categories such as Heaven and earth, up and down, superior and inferior.

“The sages established a system of men’s grades, in which the king ranked top-most, princes next, followed by soldiers while ordinary people lay at the bottom. Each of the upper grades lived on the labour of those immediately below them... By viewing society relatively Shoeki undermined the absolutes upon which the moral and political foundations of Japanese feudal society were built. He insisted that what was preached by the Confucian school as the three cardinal virtues and the five basic qualities were designed to protect and further the interest of the dominant class.

自然はこれを全体として見なければならぬ。天地，上下，優劣などの人為的範疇<sup>ちゆう</sup>を設けるのは虚偽の哲学である。正統学派はそのような範疇<sup>ちゆう</sup>をうち立て物質と社会の不易を説くことによって単に儒者僧侶が他よりも精神的に優越しており，従って他人の労働に寄生<sup>ひとりして</sup>して怠惰に生きる権利があるという臆説を正当化しようとしているに過ぎない。「真道」は自然進退にして一真道なれば転定（地）にして一体，日月にして一神，五穀にして一穀，男女にして一人，善悪にして一物，是非にして一理皆，二別に見ゆるは即ち一真営の進退である。この進退が一真営である。」とは昌益の一元論，相對論を要約したものである。自然に先後の別なしとする見解を推し進めて，昌益は新儒教がその宇宙論から類推して人間社会にも宇宙と同じく階級秩序があるとする推論を批判する。その点についてノーマンは更に次の事項をとりあげている。「聖人出て王と為りて上に立ち，上を以て大となし，衆人を以て下小と為す。之より大小の序立ちて王は大にして候は小なり，候は大にして士は小なり，士は大にして民は小なり。主は



大にして従は小と分立して、大は主として小の行業を食む。……一般に一直耕して大小上下凡て二品なきは自然なり。……」。ノーマンはこの議論に示された昌益の態度を「何人も他人を支配する権利を自然から受けなかった」というディドロの言葉で補足している。また次のように言っている。

人間社会を相対的に見ることによって昌益は日本封建社会の道徳的、精神的基礎をなした絶対権威を切り崩したのである。儒者の説く三徳五常の基本的徳目は支配階級の利益を擁護し増進するために案出するためのものであると昌益は主張する。……と論じ共鳴し賛意を表している。

(2) 日本最初の意識的教導者として「個人の権利」に対する正しい尊敬を教えた人。

In fine, I think one may with justice look upon Shoeki as the first conscious advocate in Japan of a way of life which taught a proper respect for physical productive labour, for the rights and dignity of all individuals in society.

すなわち、社会における、すべての一人びとりの権利と尊厳に対し、また肉体労働生産的労働に対して尊敬すべきである。と説く熱心な教導者として、昌益を高く評価し、また次のようにも述べている。

“Every man is distinguished from ten thousand others by a distinct and unique feature, namely his face. A man’s face, in common with all others, consists of eight parts (this concept is probably drawn from Chinese medicine and the I Ching).

「男女は<sup>ひと</sup>万万人にして只一人なる明証の備り、面部を以てより知れて在り。面部の八門(この考え方は恐らく中国の医学および易から来たものであろう。)に於て二別なきことは、これは上に貴き聖王の面部として九門十門に備るなく、これは下賤しき民の面部として七門六門に備る者なし。面部に大小長短円方の小異あれども、八門の備りに於て全く二別有ることなし。これ人に於て上下貴賤の二別なき自然備極の明証なり。」と昌益が東洋医学を根拠としながら人間本来の奪うべからざる平等を主張することができたのであった。と、また昌益が嚴重な刑罰は犯罪防止に効果がないといているところは近代的刑法思想に近づいてもいる。彼は問題を第一原理にまでつきつめ苛酷で恣意的な法律は犯罪を抑制するどころか罪人を多くするばかりであるといっているが、これなどは現在では社会改革者ばかりでなく、刑法学者、法学者の一般に認める見解である。と評している。

(3) 重農論の独創的特徴

The most original feature of Shoeki’s physiocracy is that unlike any other Japanese thinker of his generation he dismissed the bushi (warrior class) as totally worthless, as drones, as mere food-consumers who discharged no socially useful function and hence they had no place in his plan of reform.

昌益の重農論の最も独創的な特徴は、かれの時代のどの思想家とも異なって武士を全く無用の怠け者、社会的に何ら有用な機能を行わない単なる穀潰しであり、従って彼の改革案では何らの役割ももたない者として排撃したところにある。これこそ実に昌益の思想の本質であり、目ざす社会は大体において独立農民からなり、武士階級の存在しない農本民主主義で貫く。職業軍人からなる大常備軍の必要な社会を招来するこの綱領は今日ではただに合理的であるばかりでなく実現しうるものと思われる。それがはじめて提唱されてから二百年の歳月をふり返るならば、それは大胆にして創意にとみ、しかも本質的において現実的な精神にはじめて構想しえたものであった、と激賞している。

- (4) 平和を愛し、平和を求める人、昌益

Above all else he was a lover of peace and the pursuits of peace; hence in the proper sense, a civilized man. His character and spirit are mirrored in the words of Euripides, ...

何よりも昌益は、平和を愛し、平和を求める人であった。従って武力を否定する正しい意味での文明人 *civilized man* であった。その性格と精神とは古代詩人のうち最も人間らしい人エウリピデスが科学の研究と知識の自由の先駆者アナクサゴラスへの友愛から書いた次の言葉に映っているといえよう。「幸なるかな、自然の考察に基づく知識を把握せる者。かかる人は同胞に悪をひき起さず、また自ら不正にくだることなし。ただ不滅なる自然の悠久の秩序が何より、いかに、また何故に成り立つかを観るのみ。かくの如き人の心に賤しき行いの学問は宿りえぬ。」と。じつに最上の賛辞と称せずして何であろう。

- (5) 昌益の思想が広い視野にたち世界的関連をもつものとして、次の a, b, c の三重要観が詳述されているが、ここでは要点のみを指摘することにする。

- a. 諸外国との深い関連を示す客観的認識。

One of the most significant features of Shoeki's thought, partly no doubt deriving from his concept of social relativity was his deep interest in foreign countries.

- b. 最大の重農論者 *profession Quesnay* (フランス) との著しい類似性。

But the resemblance of Shōeki to the greatest of the Physiocrats, François Quesnay (1694–1774) is striking. By profession Quesnay too was a physician but agriculture was his real love.

- c. 下層階級の勇敢な代弁者をつとめた *Winstanley* (イングランド) との酷似性

Winstanley, in the vivid imagery drawn from Scripture, expressed the resentment and yearning of the oppressed of that age. Shoeki too, by associating himself with the interests of the Japanese peasantry, was able to clothe their complaints and aspirations with telling and meaningful words.

#### 安藤昌益の著書ならびに 'ANDO SHOEKI AND THE ANATOMY OF JAPANESE FEUDALISM,' および 'A forgotten philosopher, Ando Shōeki' に対する批判

上記の著書については数々の批評が寄せられているが、ここでは家永三郎氏の「史学雑誌」第五十九篇第六号に投稿されたものおよび宮城公子女史の「歴史科学協議会編『歴史の名著』(外国人篇)」によせられた二編を掲げることにする

1. 家永三郎氏による批判

氏はノーマン氏の著書に対しては「氏の本領とする高度の歴史科学的考察を縦横に加えたもので資料の上から言っても昌益研究として最高の水準と評価し、著者が「和洋種々の思想や哲学についての豊かな教養が昌益の思想との比較研究と言う形でこれまた有益に働いていて、昌益の思想の歴史的意義をあさやかに浮び上らせる役割をしている」とこれらの点を認めつつ、しかもノーマンの最上級の昌益称揚を批判して、「このように昌益の歴史的地位を高く評価する著書の昌益観は」、「不幸にしてノーマン氏の昌益研究は、講座派の過大評価の線に沿って実を結んだ」と位置づけ「農民一揆が封建社会崩壊の決定的要因であったという様な理由で昌益の農民一元論的理想を近代的であるとすることはできない」、「商工業否定は当時の商人が封建社会に寄生していたからと言うだけの理由で弁護するにはあまりに固陋なる反動論である。」ま

た「きわめて近代的革命的な進歩性がきわめて保守反動的な停滞性と渾然一体となっている処に昌益の思想の特異なる歴史的な性格があり、そこに江戸時代日本社会の歴史的宿命が横たわっているのである。」と述べている。

## 2. 宮城公子女史による批判

「ノーマンは独立農民を基礎とした昌益の『自然世』の社会秩序を当時としてはあまり進んだ民主主義綱領というがそれは封建性の批判、人間の自由と平等という民主主義では進んでいたにしても、自然へのはたらきかけを拒否し原始社会の生産力の水準に立ちかえることであった。」と論じている。

### 「大序巻」ならびに「真道哲論の現代的意義

以上、各項目に叙述してきたことをここに総合して上記二書の現代的意義を考察する。

先ず最初に考えなければならぬことは昌益の在世した頃の時代的基盤である。彼が生を享けたのは通説によれば正徳・享保・寛保・宝暦、すなわち文化花やかなりし元禄の直後から中興の英主・吉宗の享保の治と称せられるに至る間である。まさに江戸幕藩体制下の封建制度のまっ只中、しかも享保十七年は西国虫害による大飢饉、宝暦五年は久留米大一揆の起った年、そして享保を境としてこれより一揆頻発するという世情であった。こうした世代にあって、彼は封建制について徹頭徹尾痛撃する。そして貧しくして事しげき農民の立場を尊重し重農主義を一貫した。その後二百余年を経て、「すべて国民は法の下に平等であって人種・信条・性別・社会的身分又は門地により、政治的・経済的又は社会的関係において差別されない」と保障されるようになったが、彼の警世、先見は高く評価されなければならぬ。また彼が確立した「二別一真」「互性妙道の論理はこの道の権威と称せられるヘーゲルに先立つこと五十年、そして毛沢東よりは百五十年前に構成されたのである。さらに「直耕を至上として勤労農民を中核とする生産性重視の「土」の思想家としての魂の発現、以上三点は、後世におくる先駆的業績として長く光を放つと称すべきであろう。反面、非難さるべきは儒仏道医およびこれらの道に貢献の先哲にたいし、偏見盗乱、妄戯、大敵と痛罵するなど、自説を強調する余り激しく攻撃していることは当を得ていない。けだし人類の諸文化はそれぞれ特有の文化価値を宿し、多年にわたる努力の蓄積ともいうべき意義深き文化の諸形態であるから、これらを端的に否定し去る論述は保守的であると思う。また彼の説く「自然世」の実現は、現代の著しい文明の発展、飛躍的な生産力の発達、社会的分業の目ざましい成果などの諸点に照して、今や既に現代的意義を失していると言うべきであろう。ここに昌益学説の現代への観照をなして、この稿の結びとする。

（おわり）

### 引用文献

- 1) 安藤昌益研究会：安藤昌益全集. 1, 54～58, 農山漁村文化協会（1983）
- 2) 前掲書 165～176
- 3) 前掲書 140
- 4) 前掲書 63～65
- 5) 前掲書 6
- 6) 家永三郎：史学雑誌. 6 69～73, 東京大学文学部史学会（1950）
- 7) 安藤昌益研究会：安藤昌益全集復刻. 1, 3～95, 農山漁村文化協会（1983）
- 8) 安藤昌益研究会：安藤昌益全集, 3, 93～166, 農山漁村文化協会（1983）

- 9) 松島栄一：封建時代後期の教学，新日本史講座，51，中央公談社（1948）
- 10) Norman, E.H.: Ando Shoeki and the Anatomy of Japanese Feudalism, 206 ~ 244, Trans. Asiatic Soc. Japan (1949)
- 11) ハーバート・ノーマン，大窪愿二訳：ハーバート・ノーマン全集，3，246 ~ 251，岩波書店（1977）
- 12) Ibid., 284 ~ 321